

平成 17 年度油ヶ淵生物モニタリング調査概要 水生植物調査

- ・ 調査時期：平成 17 年 8 月
- ・ 調査範囲：湖岸全域及び水際
- ・ 結果

油ヶ淵の湖岸植生分布を図 7、8 に示す。

油ヶ淵の湖岸は、法面から水辺まで陸生植物、抽水植物、沈水植物が帯状に分布した植生移行帯がみられる自然湖岸と、矢板により水際の植生移行帯が分断された人工湖岸に大別できる。代表的な場所を選択して詳細調査を行った（図 9）。

自然湖岸では、法面にシバなどが植えつけられた人工草地在がみられるが、水辺に向かって陸生植物のセイタカアワダチソウ群落、オギ群落から抽水植物のヨシ群落、沈水植物のオオカナダモ群落と連続的な湖岸植生の変化がみられる（図 11、12、14）。

一方、矢板護岸では、ヨシなど抽水植物が生育するための斜面が存在しないため、法面から水辺まで陸生植物が繁茂し、植生移行帯が形成されていない（図 13）。また、ピオトープ造成地（測線 1）については今後植物の生育状況を見ていく必要がある（図 10）。

湖内に繁茂する沈水植物（水草）は、おおむね水深 1m 程度の深さまでに観察される。生育している沈水植物の 9 割以上が外来種のオオカナダモである。オオカナダモは在来の生態系に多大な影響を及ぼす帰化植物に指定されており、油ヶ淵で確認される在来種であるホザキノフサモ、クロモ、ヤナギモの生育を阻害する恐れがある。

今後、生物モニタリングの中で、オオカナダモの分布状況についても監視していく必要がある。

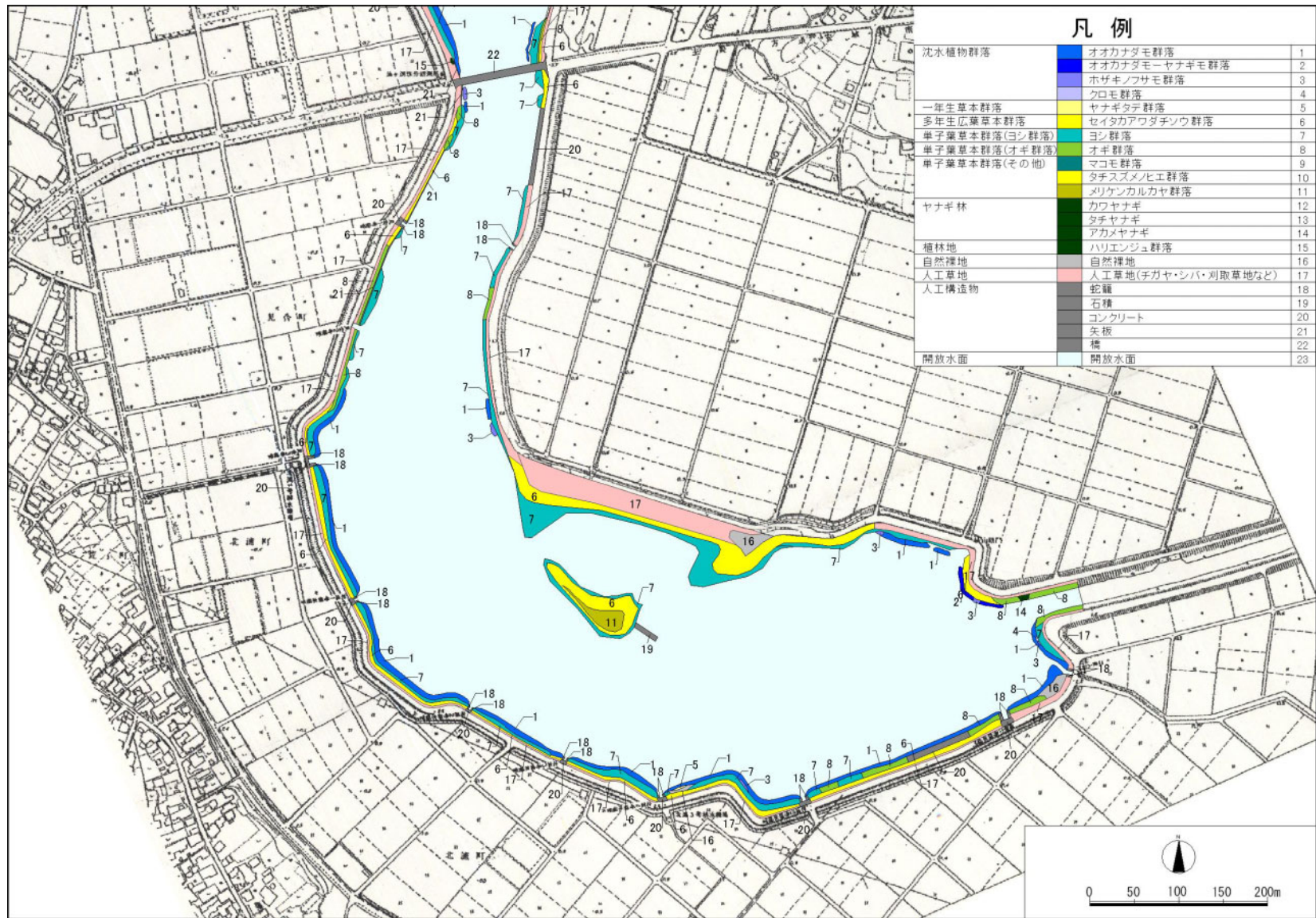


図7 植生分布図(上池)

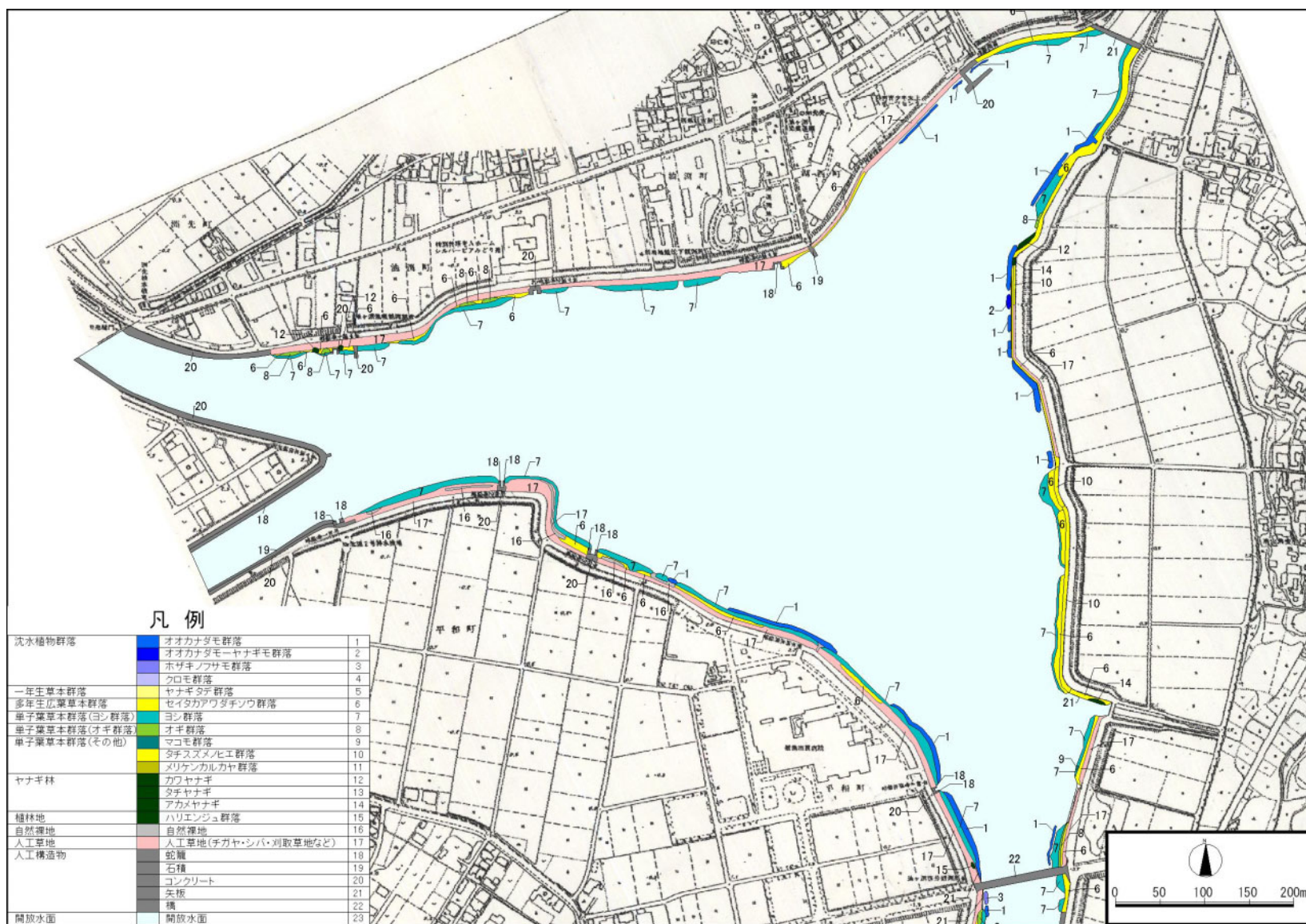


図 8 植生分布図(下池)

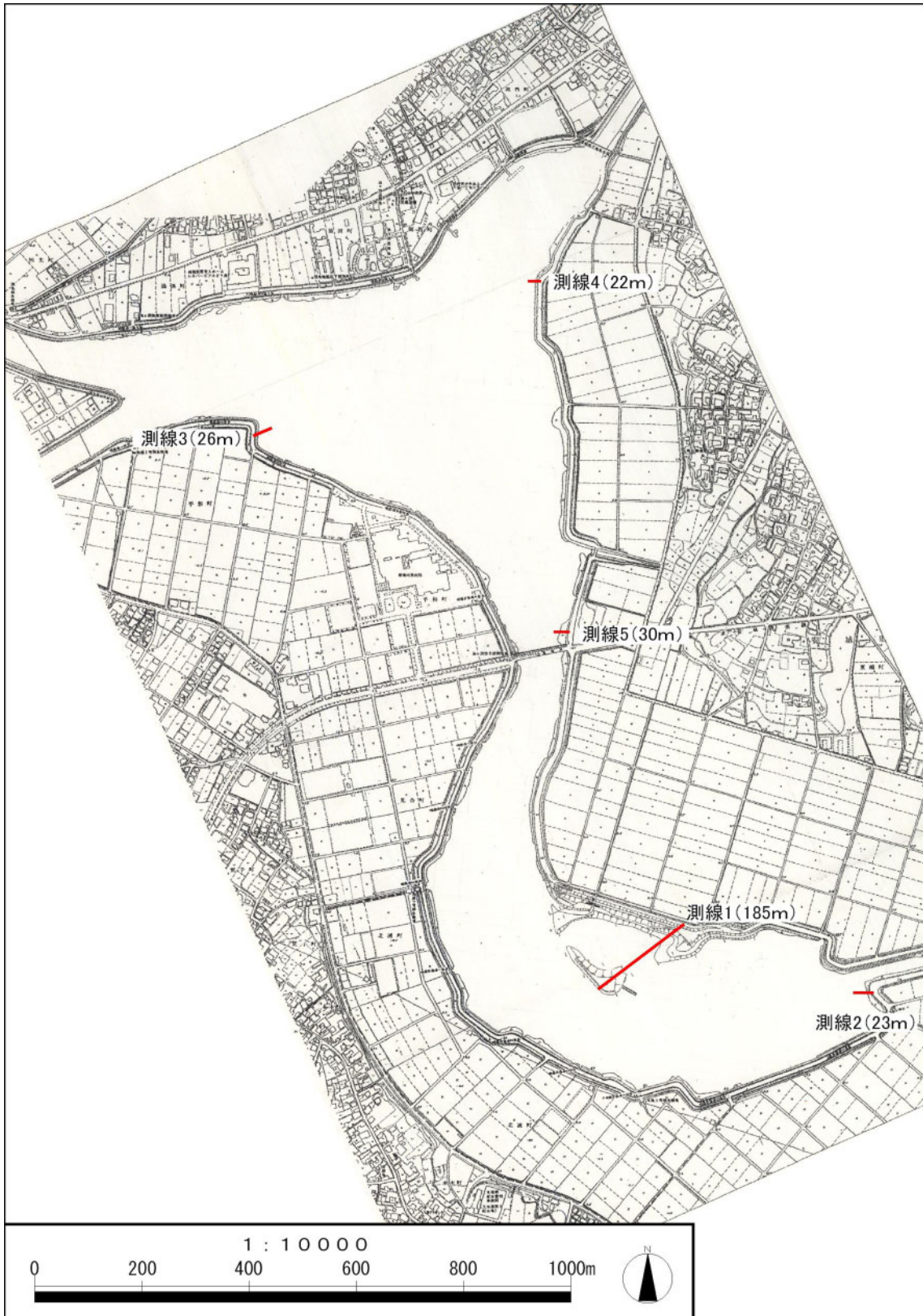


図9 詳細調査地点